東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF
TOHOKU UNIVERSITY
OF ART AND DESIGN

第29号 2022年3月

依存先を増やす
―〈居場所づくり〉実践における移行支援についての考察 ―

Increasing Dependence
― A Study about the Transition Support in the Place-Making Practice ―

滝口 克典｜TAKIGUCHI Katsunori

依存先を増やす
―〈居場所づくり〉実践における移行支援についての考察 ―

Increasing Dependence
― A Study about the Transition Support in the Place-Making Practice ―

滝口 克典｜TAKIGUCHI Katsunori

The purpose of this study is to clarify the role of intermediary communities in supporting the transition of non-elite youth.
As a result of the examination, it was found that the intermediary community supports the multidimensional transition of people in difficulty. At the same time, it was found that it creates the foundation for regional social integration.
The study was based on the practice of place-making for young people. There are two findings that characterize the intermediary community for non-elite youth.
First, there young people gained parallel access to multiple communities through choices, which became a kind of portfolio of resources that underpin their lives. This is the reality of the transition of the second standard, which is different from the social standard.
Secondly, the place-making practice has created a support space with diverse encounters in collaboration with various local resources, which has become an environment that supports the multidimensional transition of young people.
Based on these findings, it is hoped that various intermediary communities will be created and developed for young people with difficulties.

Keywords:
移行支援、第二標準、媒介的コミュニティ、居場所づくり
transition support,second standard, intermediate community, place- making

依存先を増やす
――〈居場所づくり〉[1]実践における移行支援についての考察

1.はじめに

90年代半ば以降、日本では派遣規制がゆるめられることで非正規労働が拡大し、それが正規雇用の待遇劣化をも招き寄せる下方修正スパイラルが回るようになった（熊沢2006、2007など）。そこでは、正規雇用とは、過労死／自殺へと容易に転じうる苛酷な長時間労働の世界に生きること、非正規雇用とは、貧困や排除を伴う不安定労働の世界を生きることを意味する。

これらに連動し、若者たちの「学校から仕事へ」の移行のありかた――「戦後日本型青年期」（乾2010）と呼ばれる――もまた流動化していく。かつて大半の若者たちに、学卒後スムーズに企業社会秩序の中に身を置くことを保障していた学卒一括採用のしくみが崩れ、そこからこぼれ落ちる者たちも数多く生まれるようになった。

とりわけそれは、普通科低偏差値校に通う高校生（ブリントン2008）やFランク大学に所属する大学生たち（居神編2015）など、ノンエリートの若者たちに顕著にあらわれた。一方で、そうした「漂流」する人びとを容れる受け皿となる社会保障は制度的に準備されておらず、やがて若者たちの「難民化」（雨宮2010）が常態化していくこととなった。

こうした現実を受け、2000年代に入ると、政府によるさまざまな若者支援施策が開始されるようになる。「若者自立塾」事業（2003～2010年）[2]や「地域若者サポートステーション」事業（2006年～現在まで継続）[3]などがその典型だ

が、それらの大半は、移行のゴールを「正規就労」と捉える社会的標準を前提に組み立てられたものであった（中西2007）。

しかし、企業社会がそれまで掲げてきた「企業福祉」をすべての社員に保障するのをやめたこと、ならびにその代替措置をとることを公共セクターが拒否し続けていることが移行の困難のそもそもの背景である。だとすれば、正規雇用を前提に対応を行うこと、すなわち移行のコストを企業に丸抱えさせようというのは無理筋と言うものだろう。

対象となるすべての若者を正規雇用に導くことが現実的に難しいのに、そうした前提の事業が行われ続けるとすれば、若者支援の事業主体はその対象を就労可能性の高い層に絞り込まざるを得ない。そこでは「支援」の看板のもとに、「正規就労」に到達できなさそうな人びとの選別と排除とが密やかに遂行されていくこととなる。そのとき支援は、冷却の装置となる。

では、どうしたらよいだろうか。若者たちすべての「正規就労」が理論的にも現実的にも困難なことが明白である以上、その「漂流」や「難民化」の問題を何とかしたいのであれば、支援の基準や介入の指標そのものを変更し、「正社員になること」が叶わない人びとをも包摂可能なもの――中西（2005、2009）はこれを「第二標準」と呼ぶ――に代替していく必要がある。

こうした問題意識から、近年は、若者の移行支援に関する研究・実践において、支援のゴールを「正社員になること」、すなわち企業社会秩序の正規メンバーの地位の獲得におくのではなく、別の何かとして捉えようという主張や見解が行われるようになってきた。ノンエリートをも含みこんだ、あるいはノンエリートの若者の移行という問いである。

オルタナティヴのひとつは、支援のゴールとなる「自立」を「市民性（citizenship）の実現」と捉える見解（平塚2005、2012など）である。市民性とは、社会参加にまつわるカテゴリーであり、それを基準とする移行支援とは、若者の社会参加――ここで「社会」とは、企業社会のみならず、公共空間をも意味する――を支え、可能ならしめるというものである。

筆者はかつて、滝口（2013）にて、若者支援NPOがこの市民性の実現にどのようにとりくんでいるかを明らかにしたが、移行危機の時代にあって「自立」を捉えるための基準は市民性に限られない。本稿では、それとは別の基準、すなわち、「自立」を「依存先を増やすこと」と捉える見かたを採用し、それに基づく移行支援のオルタナティヴについて検討する。

「自立は、依存先を増やすこと」とはどういうことだろうか。この表現は、脳性まひの障害当事者にして小児科医でもある熊谷晋一郎の言葉である（熊谷2020など）。障害当事者研究（障害学）の実践者でもある熊谷は、依存の反対語として「自立」を捉える見かたを避け、依存こそが障害の有無にかかわりなく人びとの生に共通の条件とする。

その上で熊谷は、障害者を「依存先が限られてしまっている人たち」、すなわち限られているがゆえに、一つひとつの依存先を強く意識せざるを得ない存在と理解する。一方、同じ見かたから健常者を、依存先が多いため一つひとつへの依存度が浅い、ゆえに「何にも依存してないかのように錯覚」している存在と捉える。

ここからは、「自立」と依存とが対立しているのではなく、「依存先の乏しさ」と「依存先の豊かさ」とが対立しており、「自立」は後者によって支えられているという理解が導かれる。ゆえに、「自立を目指すなら、むしろ依存先を増やさないといけない」ということになるわけである。つまり、障害者とは「依存先」の多寡という点で健常者と異なる／連続する存在である[4]。

障害の社会モデルにもとづくこうした見かたは、当然ながら障害者に限定されるものではなく、障害者ならざるすべての人びとにとって有効である。そこで本稿では、「自立は、依存先を増やすこと」という観点を採用し、移行支援がその対象となる人びとに対し、どのようにその「自立」すなわち「依存先を増やすこと」を保障・支援しうるのかを考えていきたい。

ところで、「依存先」とは困ったときに頼ることのできるさまざまな資源のこと、それを「増やす」とはそれらとの接点を複数つくりだしていくこと、を指している。よって以下では、「依存先を増やすこと」を、自身の身のまわりに存在するさまざまな地域資源とのつながりや関係性、アクセスを確保していくこと、そしてそれを可能な限り積み増していくこと、と捉える。

ソーシャル・キャピタル論の観点からは、つながりや関係性はそれ自体が資源であり資本である。その意味で、「依存先を増やすこと」は、困難の中にある若者たちにとって「漂流」が常態化した世界を泳ぎわたり、生き延びていくための現実的な戦略となりうる。移行支援というのは、若者たちのそうしたリスクヘッジ戦略にどう貢献する実践なのだろうか。

2.研究史

移行支援の研究・実践においては、ノンエリートの若者や「困難を抱える若者」が「自立」へ向かうにあたって頼りにしている資源として〈居場所〉が重要な役割を果たしているとの指摘が繰り返しなされてきた（中村・堀口2008、乾・児島2014など）。移行に際して足場を失ってしまったとき、体勢をたてなおすために〈居場所〉が役立っているのである。

それは、若者たちのインフォーマルなネットワークのなかで充足される場合もあれば、フォーマル／ノンフォーマルなとりくみによって供給される場合もある[5]。本稿では、〈居場所づくり〉と称される後者のとりくみ、とりわけ民間の支援主体によるノンフォーマルなそれに焦点を絞って検討を進めていきたい。

〈居場所づくり〉、すなわちノンフォーマルな移行支援に着目するのは、その現場にすでに分厚い実践や思考、試行錯誤の蓄積が存在しているためである。その多くは、制度の失敗を受けてとりくまれているものであるため、フォーマルなとりくみの課題や困難をも含めた検討が可能になる。本稿では、そうした現場の実践事例をもとに、上記の問いにとりくんでいく。

そこで、本章ではまず、〈居場所づくり〉が若者の移行支援においてどのような役割を果たしているかについて、先行研究の知見を整理する。その上で、従来の〈居場所づくり〉実践ならびに研究が抱え込んできた課題を克服しうるような理論的な枠組を提案する。そしてその枠組に沿って、次章より具体的な〈居場所づくり〉実践の事例検討に入る。

先に研究史の全体像を示す。従来の研究や実践においては、「正規就労」をゴールとする社会的標準の規範に依然強く規定された見かたが一般的であった。それを乗り越えるべく、本章では、ノンエリートの若者たちをも含んだ「第二標準」の移行支援についての理論的なスケッチを行う。それに叶う研究は管見の限り散見されはするものの、不十分である。順番にいこう。

改めて、移行支援における〈居場所づくり〉の役割とは何か。上述のとおり、〈居場所〉は「自立」にとって不可欠の過程である。そこでは、所属やつながりを失って孤立した若者たちがとりあえず帰属し、そこを拠点にさまざまな試行錯誤を行い、再び社会につながりなおしていくための足場として〈居場所〉が意味づけられている。

ある場（主に学校）から別の場（主に職場）への移行に失敗した際、その中間に自身の身を仮置きし、次のステップに向けてゆるやかに回復・準備ができるような足場。この意味で、乾・児島（2014）は〈居場所〉を「媒介的コミュニティ」と概念化した。〈居場所づくり〉とは、そうした意味をもつ場とそれへのアクセスを人びとに供給する実践をさしている。

では、そうした〈居場所づくり〉の中で、いったいどんなふうに「依存先を増やす」支援が行われているのだろうか。この点について、先行研究をもとにこれまでの達成と課題とを整理していきたい。すでに触れたとおり、従来の〈居場所づくり〉実践ならびに研究の多くは、「依存先を増やす」とりくみにはほとんど注意を払ってこなかった。まずはその点を詳述したい。

「増やす」というからには「依存先」が複数あることが前提だが、従来の移行支援の実践ならびに研究にあっては、「依存先」は単一の、大規模で持続的で安定的なもの――そのわかりやすいかたちが、大企業の正規雇用――であるべきだという規範が強く作用していた。〈居場所づくり〉の実践や研究にあっても、そうした規範の影響が強くある。

例えば、先の〈居場所〉=「媒介的コミュニティ」論（乾・児島2014）にしても、それは学校（という安定的な場）から仕事（という安定的な場）への移行にあたり、両者を媒介するものという捉えかたであり、そこでの媒介とは社会的標準に沿った単線的な移行を指している。こうした発想の背景には、「戦後日本型青年期」（乾2010）と呼ばれる慣行が存在する。

「戦後日本型青年期」とは、学校共同体から企業共同体への一回限りの不可逆的かつ全面的な足場の移し替えを指す。毎年、年度末／翌年度初めに全員一斉に行われる、あの学校から職場への所属と身分の移籍のことである。フォーマルな移行支援である「キャリア教育」も、ノンフォーマルな〈居場所づくり〉も、どちらもこの慣行の磁場から逃れられずにきた。

そこでは、ある共同体（とそれに支えられた単一的なアイデンティティ）から別の共同体（とそのアイデンティティ）へ、両足を一挙に移し替えるような移行のありかたが標準形、望ましい形として想定されている。もちろん、「戦後日本型青年期」がゴールに設定してきたのは、企業共同体の正社員の地位（とそれに支えられた単一的なアイデンティティ）である。

以上が、これまでもたびたび触れてきた社会的標準を

ゴールとする「第一標準」の移行についての規範である。しかしながら、2000年代に入るとそれらは本格的に崩れていき、「ヨーヨー型」（乾編2006）と呼ばれる不安定で可逆的な移行――不安定就業や失業、無業などのあいだを「漂流」するありよう――が若者たちの間で急速に広がっていくこととなった。

ここから、「第一標準」の規範にとどまらない、不安定性をふまえたより柔軟な規範が求められているということになる。これは、「第一標準」の移行からこぼれおちた「困難を抱えた若者たち」を主な対象とする〈居場所づくり〉においてとりわけそうであった。では、そうした新しい社会的標準＝「第二標準」の移行とは、そしてそれを支援するとはどのようなことか。

「第一標準」を前提とする移行支援の難点は、それが単一のコミュニティ（とそれが支える単一のアイデンティティ）への移行を当然視していた点にある。だが、競争が激化して社会の流動性が増し、人びとの間でアイデンティティ不安が蔓延する今日の社会においては、依存先をたったひとつのコミュニティに限定するのは困難であるとともに危険でもある。

もし仮に、移行先が「ブラック企業」（今野2012;2015）のような劣悪な場であった場合、彼（女）にそれ以外の足場がなければそこからの退出が困難となるし、退出できた場合でも、またゼロから帰属可能なコミュニティを探し出さねばならない。だが、もし彼（女）に、並行して複数の帰属先や足場があったならどうだろうか。状況は大きく変わってくるだろう。

もし彼（女）が複数の場に帰属し、足場を分散させていたとしたら、たとえそのひとつが「ブラック企業」だったとしてもその被害を最小化できるし、他の足場の支えがあるため暴力へも対抗しやすくなる。またそうした足場があれば、退出や避難もより安全に行いうる。それは複数の回路から承認を調達できるということでもあるため、存在論的安定も確保しやすい。

さまざまな文脈にまたがる複数の場に属しているということは、それらに支えられた多元的な自己（浅野2014）を生きているということでもある。それは、多様な文脈に自らを開いているということを意味し、そこでは未知なるコミュニティとの出会いにも事欠かない。要は、複数的帰属それ自体が新たな仲間や仕事との遭遇機会にもなりうるということである。

つまり、移行先、すなわち「依存先」を単一のコミュニティに限定するのではなく、複数のそれに分散させることこそが、「第二標準」の移行にあたり、ノンエリートの若者たちが採用可能な生存戦略であるということである。よって、「第二標準」の移行支援とは、異なる文脈に位置する複数のコミュニティへの接続を促進したり、それと親和的な多元的な自己を推奨したりすることを意味する。

だが、「第二標準」の移行支援をそのようなものとして構想していくとして、それは具体的には、複数のコミュニティ――その一つひとつは不安定で持続性に乏しい場である――へと「困難を抱える若者たち」を媒介していくという外形をとる。それは、「第一標準」が困難となった移行支援の現場で実際に生じている移行の失敗とほとんど変わらないようにも見える。

もしこの批判があたっているとしたら、「第二標準」の規範とは、支援のゴールを「正規就労」から「非正規就労」に切り下げ、実質的に支援の質／量を減じていくための方便そのものとなろう。そうならないためには、その移行支援が、たとえ外見上は「非正規就労」だったとしても、彼（女）が「非正規のままでも生きられる」ようにしてくれる何かである必要がある。

「第二標準」の移行支援が問われているのは、この「非正規のままでも生きられる」しくみや方法をどう構想し、それを当の若者たちに供給していくかということである。以下では、二点に絞って議論したい。一点目は、移行先が複数の小さな場からなるネットワークであること、二点目は、抵抗のための資源もまたそのネットワークから供給されること、である。

「非正規のままで生きられる」ようにするには、一つひとつは小規模で不安定で持続性に乏しい場をいくつか集めて束ね、それらに同時並行的に帰属するというやりかたでリスクヘッジを行う方法が考えられる。移行先として、単一の安定的なコミュニティではなく、それの代替となるような複数の小さな場のネットワークにつないでいくという発想である。

この点で、「第二標準」の移行支援としての〈居場所づくり〉は、「第一標準」のそれと同じ「媒介的コミュニティ」なのだが、その接続先が多元的である点に特徴がある。〈居場所〉では、複数のさまざまな「依存先」が示され、若者たちはそれらの中で自身が必要とするものを選択的に獲得していく。そこで行われているのは、多元的な地域資源への選択

的媒介なのである。

実際、移行支援の実践および研究とはやや異なった文脈で、〈居場所づくり〉の果たすそうした役割を指摘する研究がある。すなわち、「まちの居場所」と呼ばれる諸活動・研究の文脈であり（田中2019、日本建築学会2010;2019、山崎2019）、それらは主に、まちづくりや建築、環境デザインなどに関わる実践者や研究者によって進められているものである。

2000年頃より、全国各地で地域に点在する空き家／店舗が意識されるようになった。同時に、地域の福祉ニーズ増大に対処していくための支援拠点が地域社会のうちに求められるようになっていき、両者が遭遇を果たしたところで、続々と〈居場所づくり〉の実践が生成していくこととなった。「まちの居場所」とはそうした動向を名指したカテゴリーである。

「まちの居場所」のひとつ、コミュニティカフェについての質問紙調査に基づく研究（小村2014、田所2014、倉持2014）によれば、そこには地域のさまざまな資源と情報とが集まるため、参加者たちはそれらに日常的に接することとなり、結果、多様な地域資源とのつながりやアクセスを獲得していたという[6]。多元的な資源への選択的媒介が行われていたのである。

利用者を特定のカテゴリーに限定することのない「まちの居場所」は、ノンエリートの若者たちをも理屈上は排除しない。よってそこでの知見は移行支援の文脈にも応用可能である。となると、〈居場所〉とは、若者たちをさまざまな資源へと橋渡しし、複数のコミュニティやそのネットワークに支えられた多元的な自己への移行を支援しうるものだと考えられる。

以上、「非正規のままで生きられる」ようにするには、複数の小さな「依存先」のネットワークへと選択的に媒介していく道筋が必要だというのが第一の論点であった。他方で、「非正規」の不安定性やリスクを縮減・低減するためには、それらに対抗しうる知恵や情報を当人に媒介していく道筋も必要である。そうなれば、「依存先」の質を問うことができるようになる。

後者の論点については、「教育の職業的意義」を論じた本田（2009）の「適応と抵抗」論が関連する。仕事や職場の現状が労働条件において玉石混交である以上、その場に「適応」する能力だけでは不十分である。ときに「抵抗」し、自身を取り巻く環境の改善を行う能力もまた不可欠だ。そしてそうだとすれば、彼（女）らの「抵抗」を支える環境条件の整備が必要である。

例えば、労働組合や労働NPOなど、ノンエリートの若者たちの「抵抗」を支えてくれるような地域資源への媒介がそれにあたる。そうした機能を果たす場が若者たちの周囲にアクセスしやすい形で備わっているなら、それは上記の環境条件が整っているといいうるだろう。〈居場所〉が選択的に媒介するさまざまな資源には、そうしたものもまた含まれているはずである。

両者をつなぐ回路の創出としては、移行支援にとりくむ〈居場所〉が「抵抗」の資源を媒介する形もあれば、天池（2015）が論じるように、「抵抗」の資源である労働組合が〈居場所〉の機能を備え、若者たちへの敷居の低いアクセスを模索する形もある。いずれにせよ、そうした支えがあれば、ときに「抵抗」しつつ「非正規のままで」生きていくことも可能となろう。

ここまで、「第二標準」の移行支援が、単に「正規就労」から「非正規就労」への支援水準の引き下げなのではなく、「非正規のままで生きられる」ようにするためのさまざまなしくみの開発・構築とセットで行われるものであるということを二つの点から確認してきた。どちらも、「非正規」に伴うリスクを回避できるようにするための環境上の工夫を意味していた。

とはいえ、以上は理論上の想定にとどまるものであり、「困難を抱える若者」を主な対象に移行支援にとりくむ〈居場所づくり〉の事例において実際に検証される必要がある。果たしてそこでは、実際に「非正規のままで生きられる」ような移行への支援が行われているのであろうか。またそれはどのようなやりかたにおいてか。これが、次章以降で検討していく問いとなる。

以下、筆者自身がかつて関与していた〈居場所づくり〉実践を事例に、上記課題にとりくんでいく。次章で調査概要を示した後、〈居場所づくり〉がどのようにその参加者に「依存先」資源を供給しているか（第4章）、それを可能にしている条件（第5章）を明らかにしていく。それらを受け、これまで注目されてこなかった〈居場所〉のある機能について指摘する（第6章）。

3.調査概要

(1)調査の対象と方法

以下では、移行支援のノンフォーマルな主体のひとつである〈居場所づくり〉実践を対象に、そこでどのような支援——とりわけ「依存先を増やす」それ——が行われているのか、それを可能にしているのはどのような要因かについて検討していく。そこで働いている機序(メカニズム)を明らかにするのに、質問紙調査のような量的調査だけでは不十分である。

明らかにしたいのは、〈居場所〉に身をおく人びとがそこでどのようなコミュニケーションを行い、そのいかなる過程あるいはやりかたの中で「依存先」を獲得し、積み増しているのか、である。それらを、本稿では、〈居場所〉をめぐる当の若者たちの体験の語りやその場のやりとりへの参与観察の記録など、質的なデータをもとに解き明かしていきたい。

具体的には、筆者が以前その運営や活動に関与していた若者支援NPO「ぷらっとほーむ」(2003〜19年、山形市、以下「ぷらほ」と略記)の〈居場所づくり〉実践を事例に、上記の問いを検討する。数多ある〈居場所づくり〉実践の中でこの実践を事例にとりあげるのは、何より上記のような質的なデータの得やすさゆえのことである。

記述や分析のデータとしては、同団体が活動の一環として発行していたさまざまな冊子群を主に用いる。それらは、〈居場所〉実践の内情や価値をその外部に伝えるために発行されていたものであるが、その際、利用者の若者たちのさまざまな語りが素材として用いられていた。ある意味、実践に伴って生まれたリアルタイムのデータが凍結保存されたものとも言える。

とりわけ、〈居場所〉での体験をめぐる語りが豊富な二種類の冊子——外部向けの〈居場所〉案内冊子『居場所がほしいあなたのためのぷらっとほーむ入門』(B5判、約50頁、2006〜08年まで毎年刊行)ならびに、団体解散の際に発行された活動ふりかえり文集『「ぷらほ」とは何であったのか?』(A5判、約30頁、上中下巻)——を中心に検討を進める。

前者(以下、『ぷらほ入門』と略記)は、同団体の活動、とりわけ〈居場所〉での日常風景をマンガで紹介した記事や〈居場所〉での体験をめぐる利用者/スタッフの語り、スタッフどうし、利用者どうしの対談などが収められている。それらは主に、スタッフであった筆者が、他スタッフや利用者へのインタビューを通じて収集し、編集を施したものである。

後者(以下、『何であったのか』と略記)は、同団体が解散するにあたり、19年間に及ぶ活動をふりかえり記録に残す目的で発行されたもので、内容は〈居場所〉体験についてのさまざまな関係者からの寄せ書きである(計88名、各800字・未編修で掲載)。そこに、「ぷらほ」を利用していた若者たちやそれに関係した人びとの回想の語りが数多く収録されている。

さらに、筆者はかつて、「ぷらほ」利用者を含む12人の若者たちにその移行経験をめぐるインタビュー調査を実施した(その調査報告が、滝口2014)。そこで得られた若者たちの語りにも、〈居場所〉と移行の関係をめぐって示唆を与えてくれる経験談等が豊富に含まれていた。したがって、本稿ではそれらのデータをも用いながら検討を進めていく。

また、筆者は同団体の運営及び活動のスタッフとして実践現場に関与してきた。そうした参与観察で得られたデータも、〈居場所づくり〉実践の機序を質的に明らかにしていくには欠かせないものである。それらの痕跡は、「ぷらほ」がその活動の過程で残したさまざまなテクストの中に断片として散らばって存在している。本稿では、随時それらをも参照しながら論を進める。

(2)事例の概要

「ぷらほ」とは、2003年4月から2019年3月まで、山形市で「孤立しがちな若い世代の居場所/学びの場づくり」をミッションに20〜40代の会員たちによって運営されてきた〈居場所づくり〉の市民活動実践である。その共同代表を、筆者(1973年生まれ、男性)と松井愛(1976年生まれ、女性)がつとめてきた。

後述するように、年を経るごとにその活動は多岐にわたっていくようになり、それが最も活発であった時期には、実人数で年間300人以上もの人びとが参加するようなコミュニティとなっていた。なお、母体となったNPOは2019年8月末に解散し、2021年現在、その〈居場所づくり〉の活動が後継の三団体に引き継がれ、同市内の各所で続けられている[7]。

専従のスタッフは上述の松井を含む数名で、他は、別の足場をもちつつ、サードプレイス(オルデンバーグ1989=2013)として活動に関与していた。こうしたスタイルは、「タコ足モデル」と呼ばれ、推奨されていた(筆者もそうした兼業スタッフの一人であった)。ボランタリー・ベースで運営さ

れ、予算規模が年間1000万円未満の「草の根NPO」（澤村2006）である。

〈居場所づくり〉というと、「不登校・ひきこもり」など利用対象者のカテゴリーが設定されていて、その該当者だけが集まり、専門的な支援を提供される「承認の共同体」の如きものがイメージされるかもしれない。「ぷらほ」の実践はそうしたものとは異なり、雑多な人びとが同じ時空間にゆるく共在する場となっていて、その点がしばしば注目される（例えば、南出2015）。

以下ではまず、「ぷらほ」のそうしたユニークな支援実践の全体像を概観し、そのうえで本稿の問いである「依存先を増やす」とりくみに関連する諸実践について具体的に検討していきたい。とりわけそこでは、「ぷらほ」の支援空間において利用者の若者たちがどのような日常を過ごしているかが検討され、そのことの移行にとっての意味が考察されるだろう。

「ぷらほ」では、活動の始まりから終わりまでの16年間休むことなく、誰でも参加できるフリースペースが常時開設され、その活動があらゆるとりくみの中心に位置づいていた（写真①）。主に毎週水曜から土曜までの日中に開放されていたそのスペースは、若い世代に位置するさまざまな立場や年代、境遇の人びとが常時10人以上集うたまり場となっていた。

写真①　ある日のフリースペースのようす（2014年）

そしてそこでは、雑多な人びと――例えば、「不登校」「通信制生」「ひきこもり」「発達障がい」「聴覚障がい」「視覚障がい」「非正規労働」「シングルマザー」「自営業」「会社員」「大学生」「休業」「無業」「LGBTQ+」などさまざまなカテゴリーに配される人びとで、通ってくる目的や意図も多様――による、にぎやかな対話や交流が日常的に行われていた。

そうした交流は、フリースペースのスタッフやそこに集う常連メンバーなどがコミュニケーションの促進役・媒介役となることでさらに活性化される。その多くはたわいのない雑談や肩肘の張らないおしゃべりだが、むしろそれゆえに、その過程でさまざまな〈ことば〉が生成する。弱音や本音などが含まれた〈ことば〉たちである。

そうやって口にされた〈ことば〉のうちに、何らかの「困りごと」らしきものを看取すると、スタッフはそれらへの対処に動きだすこととなる。手もちの資源で対応できる場合はもちろんそうするが、「困りごと」の種類によっては、スタッフだけでは対処できないものもある（というか、雑多な人びとの集う場であるため、そういうケースの方が多い）。

そこでスタッフは、その問題に対処可能な資源をまち／地域内から探し出し、その担い手たちとつながり、彼（女）らと協働で当該の「困りごと」について考えたり学んだりできる小規模な集まり――あるとき「テーマ・コミュニティ」と筆者が名づけ、その呼称が定着している――をフリースペースの周辺に新たに開く、ということを行う。

このためテーマ・コミュニティは、まち／地域に存在するさまざまな活動主体との共同制作物とも言えるもので、増えていくにつれ、それらが地下茎のようにまち／地域のあちこちにはりめぐらされていくものとなる。その意味で、自分たちの関与しがたい時間・空間としてのまち／地域のなかに、自分たちの基地や陣地を埋め込んでいく実践でもある。

そうやって開かれていった場には、「不登校」「非正規労働」「NPO・市民活動」「地方都市」など、社会的なテーマに関連するものもあれば、「コスプレ」「花笠踊り」「映画」「まちあるき」など、サブカルチャーに連なるものもある。これらのテーマ・コミュニティが、「困りごと」を抱えた若者たちの自由に使える資源や足場となっていくのである。

こうした場のつくられかたを、ある典型的なエピソードで以て説明したい。以下は、2007年にフリースペースで生じたやりとりである。あるとき参加者Aさん（利用当時20代・女性）がふと口にした〈ことば〉から、彼女がアルバイトをしている職場で上司よりハラスメントを受けているらしいと発覚したことがあった。

いくつかのやりとりを経て、Aさんが自身のおかれた状況を「自分は仕事ができないのだからそういう仕打ちを受けるのはしかたない」と解釈し、「断れない自分が悪い」という〈ことば〉で自身を納得させ、その状況を甘受しているということ

もわかってきた。ここには、他者からの被害をなかったことにし、自己責任に回収してしまう認知の歪みが存在している。

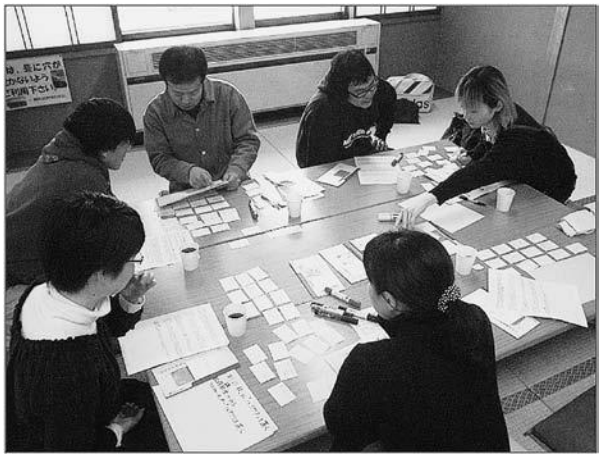
スタッフは、彼女の状況を「労働権（労働者の権利）」という観点から対処がなされるべき「困りごと」と理解し、そこにある歪みを解除するため、介入していくことを決める。そして、それに対処可能な資源として、当該地域で活動する地域ユニオンの事務局とつながることとなった（より正確には、以前に別の企画で知り合っていた事務局の知人に相談した）。

しばしの交流を経て、地域ユニオンの人びとと協働で、参加型の講座「労働相談を体験してみよう」を開催することになった（2008年2月に開催、10人ほどが参加）。先のAさんも講座に参加し、地域ユニオンという資源とつながり、彼（女）らから学びつつ、自らの「困りごと」について語るための〈ことば〉を獲得していった。

こうした講座では、参加者がそれぞれの体験について自分の〈ことば〉で語りあうという形式をとっていることもあり、他の参加者の似た悩みが明らかとなることも多い。その場合、継続的にその問題について語ったり学んだりできる場を定期的に開くことにもなり、そのテーマ・コミュニティが常設化されていくことになる。

非正規労働の若者たちがおかれた劣悪な労働環境という問題については、その後も何度か単発的に以上のようなやりとりがうまれ、対処されていったが、2011年に、非正規の問題をめぐって具体的な懸案事項を抱えている複数の若者たちで一堂に会し、労働相談の専門家——先の地域ユニオン事務局——も交えて話し合いをすることになった。

さらにはそこでのやりとりの結果、「定期的に集まれる居場所がほしい」ということになり、2011年秋から2013年春まで、月1回ペースで「ぷれカフェ」というテーマ・コミュニティが常設されることになった（写真②）。なお、これら労働問題のテーマ・コミュニティとその諸実践については、滝口（2019）において詳細な検討を行っているので、そちらも参照されたい。



写真②　ある日の「ぷれカフェ」のようす（2012年）

以上のような過程をさまざまな「困りごと」の現われに応じて繰り返すことで、「ぷらほ」は、中心にフリースペース、その周囲にさまざまな種類のテーマ・コミュニティ、そしてさらにそれらが多様な地域資源へとゆるやかに連接する、ネットワーク状の支援空間をつくりだしてきた。後にみるように、若者たちはそうしたネットワークを辿りながら移行を果たしていた。

この意味で、「ぷらほ」が行っているのは、目の前の対象者と直接向き合う支援実践——個人モデルの支援——にとどまるものでなく、そうした直接支援を効率的に果たすための環境＝舞台装置を構築していく実践——社会モデルの支援——でもあるといえる。本稿の事例を「ぷらほ」にしたのは、それが自身のそうした移行の方法論に自覚的な実践だからでもある。

4.多元的資源ネットワークへの媒介

以下ではいよいよ、〈居場所づくり〉実践がどのように多元的な資源ネットワークへの媒介を行っているかについて、「ぷらほ」の事例に基づいて検討していきたい。本章ではまず、〈居場所〉を利用していた若者たちのことばや語りをもとに、彼（女）らがどんな移行を果たしていったかについて再現的に記述する。その移行には、二つの段階が認められた。

彼（女）らは、〈居場所〉への参加を通じて、まずは自身がその身に帯びていたさまざまな規範や思い込み、偏見などから解放されるという経験を経ている。それにより、内側から自身を縛っていた規範がゆるんでいき、それらが強いていた

「〜であるべき」という思考の枠組からやがて少しずつ自由に考えたり、語ったり、行動したりする余地が生まれてくるようになる。

そうやって自由度を増したまなざしで改めて周囲を見わたすと、彼（女）らが身をおく〈居場所〉の時空間には、さまざまな資源や文化、そしてその担い手となる人びとが存在していることがわかってくる。それらからはさまざまな誘いかけもなされていて、若者たちはそれまでの孤立にもかかわらず、比較的容易にそうした場に接触し、参加していくようになる。

〈居場所〉におけるつながりや関係性、地域資源の獲得は、大まかにはそうした過程をたどりつつなされていた。そしてそれらを手にすることで、彼（女）らには地域に存在するさまざまなコミュニティへのアクセスが可能となり、ゆるやかな移行へとつながっていった。以下では、それらを〈居場所〉を利用する若者たちの具体的な語りをもとに再現してみたい。

（1）規範の相対化

まずは規範の相対化についてだが、利用者の若者たちの多くは、〈居場所〉につながる以前の、固定観念に凝り固まった自身というものを回想的に語っている。例えば、不登校経験のある若者Bさん（利用当時20代・女性）は、「ぷらほ」に通い始めた当初のことを次のようにふりかえる。そこには〈居場所〉への偏見含みのイメージが明白に横たわっている。

> 「ぷらほ」に最初に来たときは…（中略）…雰囲気にとてもびっくりしたんです。不登校やひきこもりの人が集まるものすごく深刻で暗い感じの場だと思ってきたのに、なぜか『サウスパーク』上映会をやっていて、みんなげらげら笑っていて。あの場にも不登校やひきこもりの人はいたのかもしれませんが、そんなことを全然感じさせない雰囲気だったのに驚きましたね。（「コミュニケーションの初心にかえる場所」『ぷらほ入門2007』p.34）

それが、「いつも何かしらの話題で爆笑している。ユーモアがある」（『ぷらほ入門2008［スタッフ篇］』p.30）といった場の雰囲気にほだされているうちに、次第に規範がゆるみ、凝りや硬さが抜け落ちていくという経験をするようになる。それは、喪失していた自身の感情を取り戻す経験でもある。同じBさんは別の場面で他のメンバーの問いかけにこう答えている。

> 私が「ぷらほ」で一番良かったなって思ったのが、笑えるようになったことが大きいんです。小さい頃は、絵本とか読んでるだけで感動してたりしたのに、「ぷらほ」に行き始めた10代後半頃は、感動ものとかの映画やドラマを観ても「なんだ？」みたいな素っ気ない心になってたんです。だけど行きだしてから、茶の間で家族にバレないように涙を流しテレビを見るっていうことも復活したりと、感情が復活するというそんな不思議なことがあったというのを思い出して。（「僕の「ぷらほ」を紹介します。」『ぷらほ入門2008［メンバー篇］』p.16）

不登校やひきこもりの当事者に対しては、ある種の患者役割を引き受けることが周囲から求められることになる。そこでは「ストイックに回復に専念せよ」との規範が働いており、感情行為は抑制されがちになる。感情の回復については、また別の利用者Cさん（利用当時10代・女性）も「ぷらほ」に通うようになっての自身の変化として、次のように語っている。

> わたしが「ぷらほ」に来るのは、いい意味で、ここが本当に油断できる、無防備になれる、安心できるからで、ここに来ないとわたしは八方ふさがりだからなんですけど、それ以外にも、自分から好きで来てるというのもあります。わたしは、ここにいれば必ず、本当に笑えるんですよ。やっぱり他のところだと、例えば、冗談がきかない人と話してるときなんて、そういうふうにいかないじゃないですか。だけど、ここに来れば、みんなが場の雰囲気を盛り上げてくれるし、だからわたしも、いつも受け身じゃなくて、自分から何か変わっていこうかみたいに思えるし。他のところだとやっぱり、ああしろこうしろと上から言われるわけですよね。そんなふうに決めつけられると、かえって反発したくなるんですよ。「ぷらほ」ではそういうのがない。たとえ何かを言われるときでも「ああしたほうがいいんじゃないか」みたいにやさしく言ってくれるし、私が道に迷ってしまっても「こういう道もあれば、そういう道もあるし、ああいう

道もあるよ」みたいに示してくれる。無理強いや命令形ではないので、自分からそういう道もあるのかって素直に受け止められる。だから、ここでまだ自分を変えられるかなって思ってきてます。（「いい意味で油断できる無防備になれる場所」『ぷらほ入門2007』p.39）

規範の解除に関係しているのは、笑いやユーモアだけではない。フリースペースとそこから派生するさまざまなテーマ・コミュニティという時空間には、多様な価値や文化を生きる人びとが姿を現すため、そこで過ごす人びとはそうした多文化と身近で接することとなる。そんな場の中で生じた自身の変容を、利用者Dさん（利用当時40代・女性）は次のように語る。

私は〈ぷらほ〉で多様な生きかたや価値観にふれて、今までの自分の規範がゆるんでいくのを感じました。そして、いろいろなものに翻弄されていたことに気がつき、もっと主体的に生きてみたいと思うようになりました。（「規範がゆるんでいく」『ぷらっとほーむ入門2014　第3集　ぷらほの使いかた！』[8]P.32）

「もっと主体的に生きて」いくとは、自分を取り巻いている「いろいろなもの」に「翻弄」されるのではなく、それらを自らにとっての資源と捉え、選択的に受容したり活用したりしていくことを意味する。次節では、規範から自由になった人びとが周囲の諸資源とどのような関係を結ぶようになっていくのかを引き続き「ぷらほ」の若者たちの声から明らかにしていく。

（2）新たな諸資源との遭遇・接続

そこで過ごす人びとを規範から解き放つきっかけであるとともに、解き放たれた人びとが手に入れる対象でもあるような諸資源とはいったいどのようなものであったか。それは、何らかの形で生きづらさを抱える人びとが、そこにつながることでその生きづらさを軽減でき、より安心かつ自由に生きていけるようになるためのきっかけとなるものである。

資源と聞くと、諸々の制度的なそれ――カウンセリングや通信制高校、高卒認定制度、緊急雇用など――が想定されるかもしれないが、ここでの諸資源はそうした意図された支援資源に限らない。そこには、通常は支援資源とは想定されておらず、そのようには使われていないが、「ぷらほ」の実践の中で支援ツールとして活用されているもの（非支援資源）も含まれる。

まずは、制度的な諸資源から見ていこう。〈居場所〉に身を置くようになったことで、人びとはそれまで知る機会がなくつながることができなかったさまざまな制度的諸資源へのアクセスを手に入れ、それをきっかけに移行を達成することができていた。例えば、ある若者Eさん（利用当時20代・女性）のこんなエピソードがある[9]。

彼女は中学校のときに不登校の経験があり、その後、通信制高校へと進学した。「ぷらほ」には、その通信制やサポート校と並行して通ってきていた。マンガやアニメ、ゲームなどのオタク文化が趣味で、当時は同じ趣味の若者たちが多くフリースペースに通ってきており、共通の話題でもりあがる場面も多くあった。彼女は「ぷらほ」の魅力について次のように語っている。

わたしは、友だちの間では趣味が変わっているほうなので、それについて話したくても知らない人が多いんですね。ゲームの話題とかアニメの話題とか…（中略）…そういう趣味に対して「えー、オタクなの」とか「変わってるよね」とか言われると、実際その通りなんでしょうけど、それは偏見ではないのかと。…（中略）…そういう場面があると「それはどういうニュアンスなの」って、いちいち話してたんですよ。それが偏見に基づいた発言なら「そういうことを言われたら傷つく人もいるから気をつけて」って話をして。でもいちいちそれをやるのもめんどくさくなって、最近ではもう、趣味の話はいっさい友だちの前ではしなくなっていたんですね。それが「ぷらほ」では、そういうことを出しても普通に受け止めてくれるし、むしろ興味をもってくれる人も多い。嬉しいですよね。…（中略）…他の人の趣味を否定したり嗤ったりするような人が「ぷらほ」にはいないということも大きいと思います。…（中略）…そういう空気がなければ、ゲームなんかをも話題にできるし、誰かが出したその話題にも「あたしもそれ好きなんだよね」って入り込みやすい。…（中略）…だから趣味の連鎖みたいなものが起きてるのかな。（「それぞれの趣味を自由に話題にできる場所」『ぷらほ入門2007』p.36）

当時のやりとりによれば、Eさんは、一般的な進学ルートから脱落した自分にとってありうる唯一の進路は「就職」だと

思っていたという。それが、2006年に実施された「ぷらほ」の「社会参加体験ゼミ」――大学を知らないという不登校・中卒学歴の若者たち向けの企画――に参加したことで、同県内のある大学の社会学研究室のゼミを実際に体験することになる。

オタク文化をテーマとするそのゼミに参加し、現役の大学生たちと対等に議論を行いえたことで、Eさんを含む参加者たちは、自らのうちにあった「大学／大学生」のイメージを大きく崩していくこととなる。「大学生というのは雲の上の遠い存在だと思っていたが、自分たちとなんら変わらなかった」とは、企画のふりかえりで参加者が口にしたことばである。

そうした経験の結果、Eさんには、「自分にも選択可能な進路」として大学というものを捉えなおすことが可能となった。実際に彼女はその後、当の大学に進路を定めて入学を果たし、先のゼミに所属、社会学を学んで卒業、就職していったという。〈居場所〉を介して、大学という制度的資源へとつながり、移行を果たすことができたケースである。

もうひとり、今度は〈居場所〉から仕事につながっていったケースをとりあげる。ある若者Fさん（利用当時20代・女性）のケースである[10]。彼女は2008年以降、日常的に〈居場所〉の諸活動に参加する中で、スタッフの松井、滝口よりいくつかの臨時雇用の仕事を紹介され、その都度そこに出向するように働きに出かけ、やがてそのひとつが移行先となっていった。

彼女は大卒後、進路未決のまま「新卒無業」状態にあり、23歳のときに「ぷらほ」サポーター[11]であった父親に連れられて〈居場所〉にやってくる。ほどなくしてフリースペースやテーマ・コミュニティの常連メンバーとなり、活動の一端を担うようになる。24歳には「ぷらほ」が県から委託を受けた緊急雇用の業務（出版事業）に半年間従事する臨時職員となった。

それが終わると、今度は25歳のとき、「ぷらほ」と交流のある人びとがたちあげた地元の映画製作委員会の事務局職員（2年間の臨時雇用）になる。その後26歳のとき、スタッフの松井より、彼女の知人の勤務先である福祉施設の求人を紹介され、職員（半年更新の契約社員）となり、しばらく調理スタッフとして働くことになる。やがて調理師の資格を取得した。

Fさんのケースからは、〈居場所〉に流れ込んでくるさまざまな機会の中で、自身の趣向に合った資源を選択的に引き受け、それらを渡り歩くようにスモールステップでキャリアを積んでいくようすが見て取れる。機会の大半は「非正規」で安定的でも持続的でもないが、そのひとつひとつを着実にこなすことが信用を生み、次の移行先へとつながっていったことがわかる。

このような事例が、「ぷらほ」の16年にわたる活動史においていくつも積み上げられてきた。ここからは、〈居場所〉というものが、そこに集う人びとにとってより安定的な足場への移行を支援する役割を果たしていることは明らかである。とはいえ、そうしたわかりやすいゴールに〈居場所〉を利用する人びとの多くがたどり着くわけでも着けるわけでもない。

「ぷらほ」において印象的なのは、上記に限られない、より不安定で、はかなく、小さな資源への接続である。とりわけ注意すべきは、支援には結びつかなそうな諸資源が人びとに供給され、それらが意外な形でその支えとして役立っていくという点である。例えば、ある若者Gさん（利用当時10代・女性）は〈居場所〉で得られたものについて尋ねられ、こう答えている。

> 「ぷらほ」が面白いのは、学校では経験できないようなことを経験できるところですね。例えばイベントで同人誌即売会（コミケ）に行ったのとか。そんなの絶対に学校ではないから、すごく面白いし、いいと思う。学校の友だちともそうやって遊びに行くことはあるけど、同じ年代だと趣味が同じような感じだし、見てるテレビとかも一緒で、似たり寄ったりな話しかできないんですね。でも、「ぷらほ」だといろんな人がいて、自分と年代も性別も違う人たちがいて、そういう人たちと一緒にいると、その人たちの趣味もいろいろ見ることができる。学校の友だちだと年齢も一歳二歳しか違わないし、男は男、女は女だけで固まっているから、異性と話す機会もあまりなかったかな。それが「ぷらほ」だとそうでもない。…（中略）…あとは、ギターを教えてもらったり、手話を使ったりですかね。そういうことも、学校ではちょっとかじる程度にしかやらないから。（「学校で経験できないことを経験できる場所」『ぷらほ入門2007』p.40）

雑多な人びとが「かまえない」状態でそこにいて、それぞれの「素」や「趣味」を自由に持ち込み、可視化させている場、それが「ぷらほ」のフリースペースであった。そうした場

で過ごしていれば、当然、そこに持ち込まれた多彩な趣味や文化をふつうに目にすることになるし、興味をもったものには実際に触れたり関わったりすることが可能となる。

そんなふうに、何らかの具体的な趣味や関心事を媒介に　紡がれていくつながりというものが存在する。若者文化を研究する社会学者・浅野智彦は、それらを地縁や血縁、社縁などと対比しつつ、「趣味縁」と名づけた（浅野2011）。「ぷらほ」の〈居場所づくり〉においては、こうした趣味縁というものが非常に重視され、積極的に推し進められていた。

趣味縁とは、弱い紐帯のひとつである。ネットワーク理論（増田2007、安田2010など）によれば、弱い紐帯には異なる文脈に位置するコミュニティ同士に橋をかけ、双方を媒介する機能がある。これが「弱い紐帯の強さ」と呼ばれるものだ。趣味縁にもそうした性質が認められる。つまり、何らかの趣味をもっていれば、資源へのアクセスを確保しやすくなる。

例えば、上記の若者Gさんは、もともと地元サッカークラブのファンであるという趣味をもっており、それをきっかけに13歳から「ぷらほ」に通うようになった[12]。スタッフの松井が講師となったある講演会に彼女の母親が参加し、「私は地元サッカークラブのファン」との松井の語りを聞き、それを不登校であった娘に伝えたのである。

彼女はフリースペースで、コスプレ衣装を自作していた若者たちと仲良くなり、その関連で「洋裁講座」に参加、地元の服飾専門学校のことを知る。やがて16歳になり、その高等課程に進学、〈居場所〉仲間の伝手で知ったバンドのライブにも通い始める。そのチケット代のため、17歳より洋服・雑貨店でアルバイトを始め、卒業後はそのままそこに就職することになった。

Gさんの場合、サッカークラブ、コスプレ、音楽、ファッションと複数の趣味を介してさまざまなコミュニティに並行して帰属するとともに、それらの間をゆるやかに渡り歩いていき、独自の移行を果たしていったことが見てとれる。彼女の遊歩を可能にしていたのは多岐にわたる趣味の縁であり、その多くは〈居場所〉での出会いによって紡がれたものであった。

こうした趣味縁は、先にあげた若者EさんやFさんのケースにおいても確認できるものである。Eさんにあってはオタク文化、Fさんにあっては映画にまつわる趣味縁が、それぞれの移行に深く関わっている。例えばFさんの場合、フリースペースへの着地と臨時雇用への離陸は、どちらも彼女が映画好きだったことがきっかけとなっていた。以下は彼女の回想である。

> 「ぷらほ」に初めて来たころの私は人と接することへの苦手意識が強く、お茶を飲みながらの何気ない世間話でも、大して会話が続かないという状態だった。「ぷらほ」に通うということは人と関わりを持つということで、私が克服したいと思いながらずっと避けてきたことと向き合うことでもあった。「ぷらほ」での時間はその多くが私にとっては試練であり、修行ともいえるものだったように思う。／「ぷらほ」では映画やワークショップなど様々なイベントに出かけて行ったり開催したりしていたので、おそるおそるではあったが、そこに参加することで多種多様な世界と出会うことができた。当時の私は修行などという気持ちで参加していたわけではなく、誘われたし楽しそうだからという理由だけだったのだが。結果的に多くの人や考え方に触れることとなり、初「ぷらほ」の頃よりは人と接するのが苦でなくなった気がする。（まだまだ苦手意識はあるししゃべりは不得意だけれど。）（「これからも修行は続く」『「何であったのか（中）』p.01）

このように、趣味縁には人をさまざまなコミュニティへとゆるやかにかつ選択的に媒介していく機能が内包されている。〈居場所〉は、すでに当人に備わっているそうした縁、すなわち社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）を活用しつつ、さらにはそれを増幅させることで、若者たちをさまざまな世界へと橋渡ししているのだった。

とはいえ、〈居場所〉における移行支援は必ずしも成功裏に終わるケースばかりではない。移行先が当初想定しなかったような劣悪な場であったことに、移行してはじめて気づくようなことも起こりうるだろう。不安定で持続性に乏しく、小規模なコミュニティへの移行の場合はなおさらそうである。若者たちは、そんなときいったい何を経験しているのだろうか。

ここでは、大学卒業後、緊急雇用枠で「ぷらほ」で一年間働くことになった若者Hさん（勤務当時20代・女性）のケースが参考になる。彼女がとりくんだのは、県内各地の若者活動を取材して情報誌をつくり、その編集作業を核にしたコミュニティづくりを行うという事業（2011年度）であっ

た。一年にわたる取材活動を通じて、彼女はさまざまなつながりを獲得する。

そうしたつながりのひとつが、翌年のHさんの移行先となった。取材で知り合ったあるアパレル店の店長に声をかけられたのである。かくして彼女は、「ぷらほ」での勤務を無事に終了し、そのお店に就職することとなった。ところが、そこはいわゆる「ブラック企業」で、残業代不払いが頻発していた。彼女はさまざまに葛藤し逡巡した末、「ぷらほ」の友人にそれをこぼす。

> おかしいな、と感じたのは出勤初日からだった。9時半にタイムカードを押し、1時間休憩を挟んで実働8時間、18時半に帰れるものと考えていたのに、実際に退勤を押したのは20時55分だった。/11時間拘束はいくらなんでも、と疑問をもちつつも、「まあ、初日で教わることもたくさんあったし仕方ないな」と、どうにか自分を納得させた。/しかし、残業は連日平均1時間半ほど続いた。あるときは週末で店が混んだときにレジ閉めを一人で任せられ、日付をまたいでふらふらになりながら帰宅した日もあった。/当然のように、残業代は出ない。一度、事業主に「残業が辛い」と訴えたところ、「お前らが頑張ったぶんは、こっちだって気持ちよくお金を払うさ。でも、数字で示してくれなきゃいくら頑張ったって認められない。仕事が多いなら、余計な仕事を減らせばいい」と言われて、ハイおしまい。/たしかにうちの店は売り上げが悪い。事業撤退もカウントダウンといったところだ。とはいえ、先輩スタッフの中には13時間も労働している人もいる。どこまで頑張ればよいのか、スタッフも足りずにシフト調整もままならないなか、一体どの仕事を減らせばよいのか。/自分でも「こんな状況はおかしい」と、たしかにそう感じていた。それでも「自分は新人だし、仕事も遅いし、売り上げもあげられない状態だ。仕事を覚えれば早く帰れるし、労働に見合った給料ももらえる･･･きっと、たぶん」と騙し騙し仕事を続けてきた。/そんなもやもやした想いをぽろっとこぼしたあたしに対して投げかけられた、「それはおかしい。そう思うことは間違いなんかじゃない」という友人たちの言葉に、おそらく初めて「ああ、あたしは不安定労働者だったのか」と気づかされた。（「ブラック企業に勤めてるんだが、まだ私は大丈夫かもしれない（1）」『ハタラクワタシ』[13]05号）

彼女はその後、地域ユニオンに相談することになるが、それは当時「ぷらほ」で「労働」問題を扱うテーマ・コミュニティが開かれており（第2章を参照）、その参加者に媒介されて「抵抗」のための具体的な地域資源へとつながっていったことを意味する。単なる知識だけでなく、具体的なコミュニティの仲間の存在が、相談するかどうか迷う彼女の背中を押した側面もある。

ユニオンの助けを得てHさんは勤務先と和解、残業代を得て退職に至る。その後は働きやすさを重視して駄菓子屋の店員となった。このように、「ぷらほ」の多元的資源への媒介は、単に「適応」先の相手に橋渡しするというだけでなく、もしそれが「抵抗」すべき相手であった場合、それに正当に「抵抗」できるようにするための諸資源をも当人に手渡すものであった。

*

「ぷらほ」では、利用者の若者たちが、フリースペースやテーマ・コミュニティにおける諸活動への参加を通じて、さまざまなつながり、すなわち多様な地域資源やそれらを支える人びととの関係性を手にしていた。つながりは、〈居場所〉でのコミュニケーションにより規範が相対化され、それによってうまれた余白や隙間に新規の資源を媒介していく形で生成していた。

若者たちは、ひきこもり等の経験によって自身を取り巻くさまざまな社会的ネットワークから排除され、孤立無縁の状態におかれていたが、〈居場所〉への参加を経ることで、「依存先」のコミュニティを獲得したり増やしたりしながら、多様な資源／場所へとアクセスできるようになり、再び地域や社会につながりなおしていた。これが、〈居場所〉における移行の形であった。

5.多元的媒介の要因

以上に見られたような多元的な資源ネットワークの獲得が可能となっているのは、〈居場所〉のそなえるいかなる要因によるものだろうか。本章では、「ぷらほ」における若者たちの多元的移行を可能ならしめている「①規範の解除」と「②新たな諸資源との遭遇・接続」とが、それぞれどのような条件のもとで成り立っているのかを検討していきたい。

(1)「規範の相対化」を可能にする要因

すでに簡単に触れたところでもあるが、規範の解除を可能にしている〈居場所〉の特性とは、そこにある「笑い」や「ユーモア」であった。それは人びとの間にある緊張をやわらげ、張り詰めた空気を緩和する。〈居場所〉のやわらいだ雰囲気について、ある利用者Iさん（利用当時50代・男性）は他のメンバーに「ぷらほ」の魅力を問われた際、次のように語っている。

> 普段、人と会うっていうときは、必ずみんな看板を背負って会うわけですよね。例えば「店員／客」とか「教師／生徒」とか、「先輩／後輩」とか、必ずそういう鎧とか看板とかがある。そういうのがここにはないんですよね。だから、鎧も看板もなんにもなくてゴロンと転がっていられるのもあるから、そういう人達に会いに来てる、って感じかな。…（中略）…「ぷらほ」はカッコつける必要はない。ここにいる人達も別に、俺すっごく年上だけど変に意識しないで付き合ってくれますしね。だから、俺、ここに来るとけっこう脱力してるのかな。「脱力スペース」みたいな。（「僕の「ぷらほ」を紹介します。」『ぷらほ入門2008［メンバー篇］』p.10）

では、そうした「脱力スペース」としての〈居場所〉の「笑いやユーモア」のベースにあるのは何だろうか。「笑いやユーモア」の発生基盤はさまざまにあろうが、フリースペースにおいてそれは、意外なものどうしがありえない形で組み合わされ、同じ場に共在していることの面白さ、そのギャップ（落差）がもたらす驚きや可笑しさによって生み出されるところが大きい。

それについては、「ぷらほ」で語り継がれていたいくつかのエピソードが象徴的である。ここでは二つをとりあげるが、どちらも「ぷらほ」共同代表にしてフリースペースの常勤スタッフであった松井にまつわる挿話である。これらは「ぷらほ」の界隈にて、その個性を表す挿話として繰り返し参照されていた、コミュニティの神話とも言えるものであった。

まずは一つ目のエピソードだが、フリースペースでは、そこを訪れた人びとどうしをつなぐため、スタッフがそれぞれのことを簡単に紹介するような場面が頻繁にある。その日も松井が新規参加の人に対し、すでにそこにいた人びとを紹介していたのだが、その中で「こちらは組の方、そしてこちらは組合の方」という「名言」が生まれた。

「組」とはいわゆる反社会的勢力のこと、「組合」とは労働組合のことである。たまたまその日、「組」に所縁のある常連メンバーの若者とテーマ・コミュニティの企画打ち合わせで来所していた地域ユニオンの職員とが、若者支援のフリースペースという意外な場所で同席していたのであり、松井の先の言葉はその意外性をユーモラスに表現したものだった。

通常であればおこりえないカップリングが、通常ならありえない支援空間という場にて生じているという落差、そしてそれを笑いに転嫁させるユーモアが結晶化されたエピソードである。以上はフリースペースが舞台の神話だが、次に紹介するのはテーマ・コミュニティが舞台の挿話である。「ぷらほ」メンバーで外部の交流イベントに参加したときのエピソードだ。

2006年、県が開催した若者支援団体どうしの交流イベント――各団体の利用者と支援者とが一堂に会し、レクリエーションを通じて親交を深める――に、「ぷらほ」からスタッフとメンバーとで参加した。スタッフの松井は常連メンバーだったCさん（10代・女性）とにぎやかに会場を走り回り、他団体の若者たちに片っ端から声をかけ、つながりをつくっていった。

参加者たちの多くは大人しく、おそるおそる場に参加しているような状況で、「ぷらほ」の人びとのふるまいは奇異に映ったらしい。このとき「ぷらほ」とは別の団体に所属し、このイベントを機に「ぷらほ」に通うようになる若者Jさん（当時30代・男性）は、会場を走り回る松井を「テンション高すぎなスタッフ、関わるとやばい」とやや引き気味に眺めていたという。

しかしその奇異さはどこかでJさんたちに印象を残した。彼とともに参加し「ぷらほはやばい」と感想を交わした友人が帰宅後「ぷらほ」を検索する。するとそのウェブページには「共同代表　松井愛」とある。驚いた彼がJさんに電話し発した一言が「やばいよ、あの人代表だ」。これが後に常連となるJさんにより「ぷらほ」に伝えられ、神話化していくこととなった[14]。

このように、「ぷらほ」には〈居場所〉でのやりとりからうまれた「笑いやユーモア」のエピソードがさまざまに存在し、それが「ぷらほ」の本質をあらわすコミュニティの神話として好んで語り継がれていた。各エピソードはスタッフの松井や常連の若者たちが自分たちの置かれた状況を観察し、そこにあるギャップの可笑しさを言語化することで産み出されて

いた。

このように、〈居場所〉における規範の相対化は、単にそこにいろいろな背景や属性の人がいるという多様性ではなく、意外なものどうしがありえない形で共在しているという意味での多様性、そしてその落差から「笑いやユーモア」をうみだしていこうとするスタッフとメンバーとの共同の工夫と実践とによって可能となっていたのだった。

そうした多様性は、規範や固定観念から自由になった人びとに、今度は新たな接続先や「依存先」をもたらす資源のアーカイブとなる。気づけば諸資源はすでに身近に存在しており、彼（女）らは低コストでそれらを取捨選択することができた。以下では、そうした多元的な資源ネットワークへの媒介を支える〈居場所〉の要因についてみていこう。

(2)「新たな諸資源との遭遇・接続」を可能にする要因

支援空間の内部にある人びとが、そこに居ながらにして（本来はその外部にあるはずの）さまざまな地域資源と出会うということが可能であるのだとすれば、そのためには、その支援空間内にさまざまな地域資源が「ある」という条件が整っていなければならない。いったいどのようにして、「ぷらほ」ではこれらの条件がかなえられていたのだろうか。

多様性・複数性の空間といったとき、そこには二つのありようが想定可能である。第一にそれは、その場を構成する人びとそれぞれの個性が露呈し、可視化されているがゆえに生成しているような多様性である。これは、これまで見てきたように「ぷらほ」で日常風景となっているありようであると同時に、他の〈居場所づくり〉実践においてもよく見られる光景である。

ここで注目したいのは、それとは異なる多様性の条件である。「ぷらほ」においては、その外部のさまざまな文脈に由来する諸資源が、支援空間の内部に豊富に入り込んできており、それが〈居場所〉における価値や文化の多様性・複数性を成り立たせているという特徴がある。内／外を隔てる障壁が容易に越境可能なのは、そこにたくさんの孔が開いているためである。

支援空間にその内／外を通過できる孔＝通路がさまざまに開いており、そこを通って外部からさまざまな地域資源が顔をのぞかせる――ここにこそ、「ぷらほ」が形づくってきた支援空間のユニークさが現れている。第一の多様性――利用する人びとの個性の多様さ――が他の〈居場所づくり〉実践にも共通するものであった一方で、こちらはあまり類例のないものである。

いわば「ぷらほ」は、現代を生きる人びとがスマホなどのケータイ端末を通じてオンライン・ネットワークに常時接続しているように、地域社会の各所に点在するさまざまな資源と常時接続しているといえる。こうした特徴を、社会学者・鈴木謙介（2013）に倣って、ここでは「多孔性」と呼んでみたい。それは、ネットワークのハブが備える特質である。

こうした多孔性は、いったいどんなやりかたで可能となっているのだろうか。それを担保しているのが、「ぷらほ」のユニークな実践であるテーマ・コミュニティである。そこは支援空間の中枢であるフリースペースと地域社会との中間に位置し、両者――二つの通常は交わりのないコミュニティ――の間の境界領域にあたる。いわば「縁側」や「汽水域」のような空間だ。

境界領域ゆえに、そこは両サイドのコミュニティにとって周縁にあたり、両コミュニティの規範がゆるんでいる場である。つまりは、そこがそれぞれのコミュニティにとって自身の価値や規範を問い直す契機をも含んだ実験的な場であることを意味している。このことを、「ぷらほ」と関わりの深い映画館スタッフのKさん（当時30代・女性）は次のように語っていた。

> 私が初めて「ぷらほ」と出会ったのは、フォーラム仙台から山形へ異動してきた2010年のことだ。当時、「ぷらほ」では映画の感想や意見を自由に発言する「シネマカルチャーサロン」という交流の場を、フォーラム内の会議室で定期的に設けていた。これはちょっとした驚きだった。映画愛好家の集いは、しばしばあった。だが、「居場所づくり」を掲げるNPO団体が『悪人』や『ハンナ・アーレント』などの社会派作品にとどまらず、『ノルウェイの森』というような文芸作品まで取り上げていたからだ。/聞けば、2008年には映画『ひめゆり』を自主上映したという。上映に向けて何度も勉強会を開催して理解を深め、自分たちの足で地道に券売活動を行い、監督のトークショーまで設定し上映会を成功させたというのだ。映画は、いわゆる「映画好き」のものではない、もっと広く万人に開かれた文化資源なのだと改めて気づかされた。そして、その手腕を再び発揮したのが、2017年『野火』の上映会。劇場としては三度目の興行であったにも関わらず、初見の若い鑑賞者が多数訪れたことは記憶に新しい。/印象深いのは、「ぷら

ほ」の個性豊かなメンバーはみな、どこか安心した表情をしていることだ。この社会には、生き方と社会の仕組みが合わない人や、環境にめぐまれない、「戦う必要のない戦場」に送り込まれた人がたくさんいる。かつては、私もそんな一人だった。「ぷらほ」とは、そんな戦場で孤独にならないための、あるいは背を向けるためのコミュニティであるにとどまらず、それぞれの内面を誰に憚ることなく発露できる場なのだろう。だから私たち映画館スタッフの手の届かない人や場所に、一本の映画を届けることができる。（「まだ見ぬどこか／誰かへと続く階段」『何であったのか（上）』p28）

つまり、テーマ・コミュニティには「ぷらほ」側のみにメリットのある実践ではなく、カウンターパートとなる地域資源の側にとっても参加利得のある場なのであった。〈居場所づくり〉実践がその支援資源として地域のさまざまな資源を見出し利活用していたように、地域資源の側もまた〈居場所づくり〉実践をアウトリーチのための資源として見出していた。

地域資源の側が主体的に〈居場所〉を発見し、関与していくばかりでない。ときに「ぷらほ」は不用意に訪れた地域社会の人びとを、網を張った蜘蛛が罠にかかった獲物を絡め取るように、その実践へと積極的に、しかし極めて密やかに巻き込んでいく場面も散見される。以下は、取材目的で訪れた地元テレビ局のスタッフLさん（当時30代・女性）の語りである。

私が「ぷらほ」と出会ったきっかけは、北山形駅前の小便小僧の取材でした。「山形女子専門学校の小便小僧のこと、いろいろ教えてもらおう。」そう思って、雪の降る寒い日、初めてあのドアを開けました。/もう5年くらい前のことですが、今もよく覚えています。取材に伺ったにもかかわらず、いつの間にか愛さんと世間話になって、そして、いつの間にか、当時自分が思っていたこととか、悩んでいることとか、そんなことをさらけ出していました。/ちゃんとお話するのは初めてだったのに、なんだか不思議です。でも、それが、「ぷらほ」という場所なのだと思います。いろいろな方々が集って、心を寄せられる。そんな場所であり続けたのだと思います。そんなところって、なかなかないですよね。改めて、そう感じます。（「取材に伺ったにもかかわらず」『何であったのか（上）』p22）

このように、「ぷらほ」は、テーマ・コミュニティという形で、目的があいまいで、ゆえに規範の弱い場を準備し、そこに地域社会のさまざまな行為者たちを招き寄せ、巻き込んでいた。その結果、支援空間の内部に多様な資源——支援文化に連なるもののみならず、支援文化とは関わりないものも含む——が豊富に入り込む、非常に奇妙な支援空間が生まれていたのだった。

このように、〈居場所〉における新たな諸資源との遭遇と獲得は、単にそこにいろいろな背景や属性、個性の人びとがいるという多様性だけでなく、地域に存在するさまざまなコミュニティが支援空間の内部に入り込み、そこで内部にいる人びとが外部と気軽に出会ってしまえるような社会空間のデザインによって可能となっていたのだった。

とりわけ重要であるのは、支援空間内にさまざまな多文化コミュニティが存在し、それらがゆるやかなスロープを成すようにその外部の地域社会、その各所に存在するコミュニティと連接しているという点である。こうしたしくみにより、〈居場所〉の人びとの「気づいたら外部参加」が可能となっていたのである。前章で紹介した若者Fさんの語りはそれを示すものである。

6.メディアとしての〈居場所〉

第2節での研究史の検討から明らかとなったのは、「第二標準」の移行支援とは、若者たちをとりまく地域のさまざまな資源やコミュニティへの接続を促したり、それと親和的な多元的な自己を推奨したりすることを意味しているということだった。彼（女）らは、そうした支えの中で、複数の足場への多元的帰属を獲得し、リスクヘッジしていくことが可能となった。

そうした多元的資源への媒介は、「媒介的コミュニティ」の支えを要請する。とりわけノンエリートや「困難を抱える若者」たちの場合、そこでなされる「媒介」の質が問われることとなる。ここから、「第二標準」の移行支援を考える際、どのような「媒介的コミュニティ」が求められるかという問いが生まれてくる。

また、「第二標準」というものが単に質を落とした社会標準になってしまわぬよう、そこでは「非正規のままで生きていける」ようにするためのさまざまな工夫や条件が必要となる。多様な資源への分散投資（ポートフォリオ）を構築する、

あるいはそのさまざまな「依存先」の中に「抵抗」を支えてくれるような資源を含有させていくという方法などがそれであった。

これらの問いを、ノンフォーマルな「媒介的コミュニティ」のひとつである〈居場所づくり〉実践をもとに検討してきたのが第3～4節である。「ぷらほ」の若者たちの移行のありよう、そしてそれを可能ならしめるさまざま支援実践の中に、上記の複数の資源への分散帰属や資源ネットワークへの「抵抗」資源の含有など、多元的な「媒介」の事実を確認できた。

この多元的媒介への着目こそ、本稿が、移行ならびに移行支援の研究――とりわけ「第二標準」についてのそれ――に対してなしうる理論的貢献となる。従来よりそこでは「媒介的コミュニティ」の重要性が指摘されてきたが、より正確には、多元的な「媒介的コミュニティ」こそが重要なのであった。では、その多元性はどのようにして可能になっていたのだろうか。

「ぷらほ」の事例に特徴的であったのは、それが個人モデルではなく、社会モデルに立脚した支援実践であったことである。「ぷらほ」では、若者たちそれぞれに照準しその個に対し支援を行うのではなく、彼（女）らが身をおくその場所や環境に介入するというところに支援の主眼が置かれていた。実はこのことが、「依存先」の多元性の保障にもつながっている。

これはどういうことだろうか。「ぷらほ」では、若者たちがそこで自由に、好き好きに試行錯誤を行うことのできる時空間を準備し、それを提供している。これが〈居場所づくり〉の実践である。彼（女）らは、同じ利用者の若者やスタッフらとともにそこに身をおき、いっしょに話したり遊んだり、ときに何かにとりくんだりしながら、さまざまな資源を手に入れていた。

支援というものがそうした試行錯誤のしやすい時空間の保障であるとして、若者たちはそのトライ＆エラーを徒手空拳で行うわけではない。彼（女）らは、元来保持していたさまざまな資源をそこにもちこみ、それらを元手に試行を重ね、新たに資源を増やしたり積み増したりしていく。つまり〈居場所〉では、若者たちの実践を支える環境が提供されているのである。

換言すると、若者たちがそのインフォーマルな実践にとりくみやすくなるような環境を、ノンフォーマルな支援資源を通じて提供しているのが〈居場所づくり〉実践であるということである。そこでは、移行実践のイニシアチヴはあくまで当の若者たちにあり、必然的に「依存先」はさまざまな地域資源やコミュニティへと分散していくこととなる。

このようなかたちで成り立っている多元的な「媒介的コミュニティ」――あるいは、弱目的性（藤原2020）の「媒介的コミュニティ」――こそが、「第二標準」の移行支援にとって重要であるというのが移行ならびに移行支援研究にとっての本稿の貢献である。他方で、「ぷらほ」の実践の検討からは、〈居場所づくり〉研究に対しても貢献可能な知見が得られた。

そこでは、利用する若者らにより趣味縁をはじめとするさまざまな選択縁、すなわちインフォーマルな社会関係資本がもちこまれ、それらが意図的に可視化され、活性化を図られているようすが確認できた。そうした選択縁の補強や拡充を通じて、若者たちは、〈居場所〉の外に広がるさまざまな文化圏、コミュニティへとゆるやかに媒介されていたのだった。

そんなふうに若者たちを別の足場へと橋渡ししていくことは、フリースペースの周囲に、外部のさまざまな資源と重なり合う境界領域であるテーマ・コミュニティ群をつくりだし、支援空間を外部のさまざまな足場へとゆるやかに連接させていく実践によって可能となっていたものである。それらは、外部の地域資源にとっても魅力を有するものとなっていた。

ここからは、〈居場所〉そのものが地域の中である役割を果たしていることが見てとれる。まずそれは、地域に存在する他の資源や足場へと人びとをつなぐ媒介（メディア）としての機能していた。一方でそれは、人びとの橋渡しという行為を介して、複数の互いに異なる文脈にあるような資源やコミュニティどうしをつなぐメディアとなっているということでもある。

専門分化の進展、あるいはその逆機能により、地域や社会には、領域ごとのさまざまな分断や断絶が生まれている。学校から仕事への移行に困難を抱えるノンエリートの若者とは、そうした分断の谷に落ちてしまった人びとともとらえることができる。そうした人びとの再包摂のとりくみは、分断線上に「媒介的コミュニティ」を上書きするようなものである。

そうなれば、その「媒介的コミュニティ」は、それまで分断されていたコミュニティどうしをつなぐもの、すなわちメディアとして機能することになる。その「媒介」が多元的かつ複数的であればあるほど、それは社会や地域のさまざまな裂け目を弥縫し、つなぎあわせるものとなる。要するにそれは、地

域における社会統合の装置としても役割を果たしているのである。

7.おわりに

本稿では、「第二標準」を前提とした移行支援のありよう、その達成と課題について、〈居場所づくり〉実践の事例をもとに検討してきた。そこでは、多様な地域資源をその支援空間内に引き込む形で大小さまざまな資源ネットワークのハブを創出し、そこへの帰属を保障することで、困難を生きる若者たちに地域資源を選択的に媒介するというとりくみが行われていた。

それらは、制度的な支援から見放されがちなノンエリートの若者たちを個別に支援するというだけでなく、あるいはそれ以上の熱心さで以て、彼（女）らをとりまくコミュニケーションの環境をデザインするという発想でとりくまれていた。よってそれは、その〈居場所づくり〉実践が活動するまち／地域の資源分布に何らかの再編を促すものともなっていた。

ところで、「依存先を増やす」移行の形は、「困難を抱える若者」とその支援にまつわる文脈だけで観察されるものでも、とりくまれているわけでもない。本稿の対象とはやや異なる文脈においても、それらに似たとりくみが報告されている。「ナリワイ」（伊藤2017）や「月3万円ビジネス」（藤村2011）といった、「ローカル志向」（松永2015）の諸実践がそれである。

そこでは、〈居場所〉の若者たちが模索していたのと同様に、小さな、しかし自分の趣向に合致した無理のない足場――その一つひとつが「ナリワイ」や「月3万円ビジネス」と呼ばれる――を複数確保し、組み合わせ、ポートフォリオとして生計全体を成り立たせていく方法が提唱されていた。異なるのは、それが農山村を舞台に組み立てられていたことくらいである。

それらの多くは、（ノンエリートならざる）エリートの若者たちが自らの帰属する大企業やそれが立地する大都市という環境に飽き、その活躍の場を「地方」に向けるようになったことで生まれた「ローカル」ブームに由来するものである。もともと出身階層や学歴ゆえの豊富なソーシャル・キャピタルを保有する層だからこそ、それらが可能となっている面は否めない。

しかしそのことは、そうしたソーシャル・キャピタルの不備を補い、それらをも随時補給してくれるような支援環境さえ地域の中で整えていくことができるなら、ノンエリートの若者たちにとっても該当するありようだということを示している。たとえ生来そうした資源や資本に恵まれなかったとしても、後づけでそれらを供給してくれる機会があればよい。

まだほんの萌芽にすぎないものの、そうした観点から「第二標準」の移行支援を構想していこうという議論も始まっている。例えば、藤井（2021）では、困難を生きる若者たちにそうした機会を提供する主体として「社会的連帯経済」を位置づける。それに関して参照される事例の大半は国外のものだが、同様のとりくみは実際には国内でも各地に存在するであろう。

本稿で扱った〈居場所づくり〉実践もそうした「社会的連帯経済」のひとつとして理解可能である。もちろん、〈居場所〉のみならず、若者の移行に関わるさまざまな現場――大学もそのひとつだ[15]――においても、「第二標準」の移行を支えるさまざまな工夫や試みが行われているだろう。そうした豊かな鉱脈に引き続き目を凝らしつつ研究と考察とを続けていきたい。

参考文献

浅野智彦（2011）『若者の気分:趣味縁から始まる社会参加』岩波書店。

――――（2014）「多元的自己と移行過程」溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション:変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版、183-213頁。

天池洋介（2015）「労働組合における〈場〉の機能　共存型居場所による多様性のある労働組合の展望」『社会文化研究』第17号、91-107頁。

雨宮処凛（2010）『生きさせろ!　難民化する若者たち』ちくま文庫。

居神浩［編］（2015）『ノンエリートのためのキャリア教育論:適応と抵抗そして承認と参加』法律文化社。

伊藤洋志（2017）『ナリワイをつくる:人生を盗まれない働き方』ちくま文庫。

乾彰夫編（2006）『不安定を生きる若者たち　日英比較　フリーター・ニート・失業』大月書店。

乾彰夫（2010）『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち　個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店。

乾彰夫・児島功和（2014）「後期近代における〈学校から仕事への移行〉とアイデンティティ:「媒介的コミュニティ」の課題」溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション:変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版、215-236頁。

小村由香（2014）「コミュニティカフェに集う人びと:地域における居場所とコミュニケーションの変容　選択縁・相互承認・多世代交流」長田攻一・田所承己編『〈つながる／つながらない〉の社会学:個人

化する時代のコミュニティのかたち』弘文堂、134-160頁。
レイ・オルデンバーグ（1989=2013）『サードプレイス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』忠平美幸訳、みすず書房。
熊谷晋一郎（2020）『当事者研究:等身大の〈わたし〉の発見と回復』岩波書店。
熊沢誠（2006）『若者が働くとき:「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』ミネルヴァ書房。
———（2007）『格差社会ニッポンで働くということ:雇用と労働のゆくえをみつめて』岩波書店。
倉持香苗（2014）『コミュニティカフェと地域社会:支え合う関係を構築するソーシャルワーク実践』明石書店。
今野晴貴（2012）『ブラック企業:日本を食いつぶす妖怪』文春新書。
————（2015）『ブラック企業2:「虐待型管理」の真相』文春新書。
澤村明（2006）『草の根NPOの運営術』ひつじ書房。
鈴木謙介（2013）『ウェブ社会のゆくえ:〈多孔化〉した現実のなかで』NHKブックス。
滝口克典（2012）「「キャリア教育」に代わる移行支援:アートを学ぶ若者たちの地域活動から」『教育』2012年9月号、104-112頁。
————（2013）「就労支援のオルタナティヴに向けて　若者支援NPOの市民教育実践より」『社会文化研究』16号、161-181頁。
————（2015）「「居場所」はどのように達成されているか?　フリースペースにおける若者支援の実践事例をもとに」『東北芸術工科大学紀要』22号、112-129頁。
————（2017）「「ぷらほ」の奇妙な実践:支援の社会モデルより」『月間社会教育』737号、34-38頁。
————（2018）『若者たちはヤマガタで何を企てているか?:ポスト3.11の小さな革命者たちの記録』書肆犀。
————（2019）「非正規労働の若者たちは何を求めているか?:労働NPOのアウトリーチ実践より」『社会文化研究』21号、71-93頁。
田所承己（2014）「コミュニティカフェとモビリティ:地域空間における〈つながり〉の変容」長田攻一・田所承己編『〈つながる／つながらない〉の社会学:個人化する時代のコミュニティのかたち』弘文堂、80-106頁。
田中康裕（2019）『まちの居場所、施設ではなく。:どうつくられ、運営、継承されるか』水曜社。
中西新太郎（2005）「青年層の現実に即して社会的自立像を組みかえる　安心して生き働ける最低限の保障を」佐藤洋作・平塚眞樹編『ニート・フリーターと学力』明石書店、230-257頁。
————（2007）「「自立支援」とは何か　新自由主義社会政策と自立像・人間像」後藤道夫・吉崎祥司・竹内章郎・中西新太郎・渡辺憲正『格差社会とたたかう　〈努力・チャンス・自立〉論批判』青木書店、177-216頁。
————（2009）「漂流者から航海者へ　ノンエリート青年の〈労働-生活〉経験を読み直す」中西新太郎・高山智樹編『ノンエリート青年の社会空間　働くこと、生きること、「大人になる」ということ』大月書店、1-45頁。
日本建築学会［編］（2010）『まちの居場所:まちの居場所をみつける／つくる』東洋書店。
————［編］（2019）『まちの居場所:ささえる／まもる／そだてる／つなぐ』鹿島出版会。
平塚眞樹（2005）「次代をひらくシティズンの形成　信頼再生プロセスへの参加保障」佐藤洋作・平塚眞樹編『ニート・フリーターと学力』明石書店、258-280頁。
————（2012）「子ども・若者支援の政策と課題」田中治彦・萩原健次郎編『若者の居場所と参加　ユースワークが築く新たな社会』東洋館出版社、52-69頁。
藤井敦史（2021）「社会的連帯経済と若者支援」宮本みち子・佐藤洋作・宮本太郎編『アンダークラス化する若者たち:生活保障をどう立て直すか』明石書店、145-161頁。
藤村靖之（2011）『月3万円ビジネス』晶文社。
藤原辰史（2020）『縁食論:孤食と共食のあいだ』ミシマ社。
メアリー・C・ブリントン［池村千秋訳］（2008）『失われた場を探して:ロストジェネレーションの社会学』NTT出版。
星加良司（2007）『障害とは何か:ディスアビリティの社会理論に向けて』生活書院。
本田由紀（2009）『教育の職業的意義:若者、学校、社会をつなぐ』ちくま新書。
増田直紀（2007）『私たちはどうつながっているのか:ネットワークの科学を応用する』中央公論新社。
松永桂子（2015）『ローカル志向の時代:働き方、産業、経済を考えるヒント』光文社新書。
南出吉祥（2015）「『居場所づくり』実践の多様な展開とその特質」『社会文化研究』17号、69-90頁。
安田雪（2010）『「つながり」を突き止めろ:入門!ネットワーク・サイエンス』光文社新書。
山崎亮（2019）『ケアするまちのデザイン:対話で探る超長寿時代のまちづくり』医学書院。

引用資料
※直接言及・引用したもののみ

滝口克典編（2014）『“その後”を生きる私たち:不登校・ニート・ひきこもりを体験した人びとのサバイバル・ストーリー』（B5判、36頁）
ぷらっとほーむ編（2006）『居場所がほしいあなたのためのぷらっとほーむ入門』（B5判、40頁）
————編（2007）『居場所がほしいあなたのためのぷらっとほーむ入門2007』（B5判、48頁）
————編（2008）『居場所がほしいあなたのためのぷらっとほーむ入門2008［メンバー篇］』（B5判、52頁）
————編（2008）『居場所がほしいあなたのためのぷらっとほーむ入門2008［スタッフ篇］』（B5判、52頁）
————編（2012）『いまを生き抜くための若者しごと冊子　ハタラクワタシ』（季刊05号、A5判、40頁）
————編（2015）『ぷらっとほーむ入門2014　第3集　ぷらほの使いかた!』（A5判、40頁）
————編（2019）『「ぷらほ」とは何であったのか?』（上・中・下巻、A5判、各29～30頁）

[1]本稿では、実践現場で生成した語彙が概念化され、それが研究の文脈でも踏襲して用いられているような場合、その概念を〈　〉で表記している。具体的には、〈居場所〉〈居場所づくり〉〈ことば〉などがそれにあたる。

[2]「若者職業的自立支援推進事業」。ニート状態の若者たちの就労支援を目的に、厚生労働省からの委託を受け、財団法人日本生産性本部が実施した。具体的には、全国各地の事業主体「塾実施者」20団体が選定され（のち30団体まで拡大）、2005年より5か年計画で事業を実施した。事業自体が2010年度をもって終了。

[3]通称「サポステ」。厚生労働省による事業。若年無業者（15～49歳までの働くことに悩みを抱えている者）の就労支援を目的に、2006年より実施されている。全国各地の若者支援団体（NPO法人、株式会社など）などから厚労省が認定、実際の業務を委託して実施されている。2021年現在、177か所の「サポステ」が稼働している。

[4]障害（ディスアビリティ）の社会理論を探究した星加（2007）によれば、障害とは、「不利益の集中」として記述可能な社会現象である。個々の「不利益」に注目すれば、障害者と健常者は連続しているように見ることもできるが、その「集中」に注目すると、両者には明らかな差異がある。「依存先」の多寡もこれと関連する。

[5]公的制度外部のとりくみ――家族や友人、ボランティア、NPOなど、その担い手はさまざま――を示すさい、福祉学ではそれらをインフォーマルなものと総称するが、教育学ではそこにインフォーマル／ノンフォーマルの線を引く。本稿では後者の用法に従っている。「自助・共助・公助」という概念と対比させると、インフォーマルは「自助」すなわち自分自身や家族、友人関係といった資源によって何とかしようとすること、ノンフォーマルは「共助」すなわちボランティア・NPOや当事者グループなど隣人との助け合いによって何とかしようとすること、フォーマルは「公助」すなわち行政（中央政府・地方政府）が供給する公共サービスによって何とかしようとすることを意味する。

[6]これらコミュニティカフェの研究では、主に質問紙調査によって、参加者が〈居場所〉でつながりやネットワークを獲得しているという事実が明らかとなっている。しかしながら、それが〈居場所〉のいかなる機序によるものであるのか、どういう理路でそれが生じているのかについては解明されないままである。本稿では、その部分を明らかにしていきたい。

[7]後継の三団体とは、山形市南原町に拠点をおいて活動する「クローバーの会@やまがた」、同市銅町に拠点をおいて活動する「ぷらいず」、同市緑町に拠点をおいて活動する「よりみち文庫」。

[8]先に説明した2006～08年までの『ぷらほ入門』とは異なる。2013年、「ぷらほ」がその活動拠点を当初の山形市江南から同市緑町に移した際、改めて〈居場所づくり〉の活動を広く周知する必要性が生じた。こうしたニーズを受け、2014年に改めて作成されたのが『ぷらっとほーむ入門2014』（第1～3集、A5判、各40頁）である。

[9]Eさんのエピソードについては、主に『ぷらほ入門2007』をもとに記述した。

[10]Fさんのエピソードについては、主に滝口（2014:18-19）を参照のこと。

[11]「ぷらほ」では、その活動を金銭的に支える支援者のカテゴリーとして「スポンサー」と「サポーター」が存在した。前者は個人3,000円、団体5,000円の年会費を負担する人びと、後者は金額任意で月ごとに会費を負担する人びとのカテゴリーである。彼（女）らには、毎月発行されていた会報誌『ぷらっとほーむ通信』が届けられていたが、どちらにも総会や運営委員会での議決権はない。

[12]以下、Gさんのエピソードについては、主に滝口（2014:08-09）を参照のこと。

[13]通称『ハタワタ』。不安定労働の若者たちのテーマ・コミュニティとして2011年に創設された「ぷれカフェ」――「プレカリアート」のカフェという意味――において、季刊で発行されていた情報誌（A5判、各40頁）。「ぷれカフェ」ならびに『ハタワタ』については、滝口（2019）を参照。

[14]『ぷらほ入門2007』にて、さまざまな語り手によってそれが再現されているのを確認できる。他にも、フリースペースでのおしゃべりをはじめとするさまざまな場面で、このエピソードが「ぷらほ」の面白さを象徴的に示すものとして人びとの話題に頻繁にのぼっていた。

[15]筆者はかつて、滝口（2012）において、東北芸術工科大学のチュートリアルの学生たちの地域活動実践を「第二標準」の移行支援という観点から検討した。あわせて参照されたい。